

# 交流集会「大学が展開する放射線リスク コミュニケーションの教育」

## Various educational programs on radiation risk communication by Hirosaki University

木立 りり子<sup>1</sup> 則包 和也<sup>1</sup> 辻口 貴清<sup>1</sup>

小倉 巧也<sup>1</sup> 工藤 幸清<sup>1</sup> 山田 基矢<sup>1</sup>

工藤 麻理奈<sup>1</sup> 成田 秀貴<sup>1</sup>

清水 真由美<sup>2</sup> 菊池 和貴<sup>2</sup>

Ruriko KIDACHI<sup>1</sup> Kazuya NORIKANE<sup>1</sup>

Takakiyo TSUJIGUCHI<sup>1</sup> Koya OGURA<sup>1</sup>

Kohsei KUDO<sup>1</sup> Motoya YAMADA<sup>1</sup> Marina KUDO<sup>1</sup>

Hidetaka NARITA<sup>1</sup> Mayumi SHIMIZU<sup>2</sup> Kazutaka KIKUCHI<sup>2</sup>

1 弘前大学大学院保健学研究科

2 弘前大学被ばく医療総合研究所

1 Hirosaki University Graduate school of Health Sciences

2 Hirosaki University Institute of Radiation Emergency Medicine

弘前大学大学院保健学研究科における被ばく医療人材育成の取り組みは平成20年度から、後継事業に継続して現在まで続けています。そのなかで、放射線リスクコミュニケーション教育部門は、大学と連携締結している福島県浪江町での支援活動による知見も活かし、放射線リスクコミュニケーションの知識を普及させるための教育・教材開発の実施をミッションとしています。この度の交流集会では、本部門が展開している放射線リスクコミュニケーションの教育実践について4名から報告させていただきました。自大学の取り組みの報告ではありますが、49名と多くの方にご参加いただき、意見交換する機会を持てたことに厚く感謝しております。

交流集会では、看護学領域の木立りり子は、①「大学教養科目における学部越境型アクティブラーニング」について、同じく看護学領域の則包和也は、リスクコミュニケーションの開発教材を用いた②「教員免許状更新講習におけるリカレント教育」について、放射線技術科学領域の辻口貴清は、③「被災住民への放射線リスクコミュニケーションにおける学部生、院生の参加体験学習」の教育的効果について、同じく放射線技術科学領域の小倉巧也は、放射線に関する開発教材を用いた④「浪江町で展開する小・中学校児童生徒と住民を対象とした体験型放射線学習」について紹介しました。基本構成は、放射線とリスクコミュニケーションの知識の統合であり、教育の対象者と人数に応じて、時間と内容を組み立てています。教育方法は、実験と実践事例に

基づくアクティブラーニングを基調とし、根底には、被災住民の思いを理解して寄り添うことを重要視しています。

意見交換においては、放射線リスクコミュニケーションに関しては複数の大学で教育を展開しており、普遍的な教育内容が存在しないことから、共同で行うことが提案されたこと、相手の心理や痛みを理解することに長けている保健学系の教員が行うリスクコミュニケーションが重要であり、保健学系教員が専門領域を超えて連携して教育を展開する意義があること、「伝わる」ためのスキルを高めるために良い実践例の蓄積が大事であることなど、肯定的で貴重なご意見をいただきました。また、放射線リスクコミュニケーション教育においては他大学との連携も重要であると再認識できました。今回いただいたご意見を踏まえ、さらに実践的で質の高い教育実践が行えるよう研鑽してまいります。